鹿角大規模農道遺跡分布調查報告書 沢田遺跡発掘調査報告書

1974. 3

秋田県教育委員会

# 秋里県建蔵文化財セング

鹿角郡大規模農道工事は、鹿角市花輪字西町を起点に、東町、長野、級の木、下草木、風張、腰廻、 芦名沢、長者久保、四ツ谷を経て小坂町牛馬長根、上川原で小坂線に結ばれる総延長15.1キロメート ル、幅 7.5メートルのアスファルト舗装工事である。この道路は、すでに着工している花輪地区の農 免道路、県道尾去沢線、さらに八幡平地区の曙農免道路と結ばれ、現在の国、県道の副路線として交 通緩和にも役だてるほか、畑地帯の再開発、農業資材の搬入、国立公園十和田、八幡平を結ぶ観光路 線にもなり、鹿角地方の発展にとって重要な開発工事業である。

県教育委員会では、この開発工事にかかわる路線の埋蔵文化財保護の立場から、本年度分布調査を 奥山潤氏に委託実施し、本報告書にみられるとおり、6か所の遺跡を確認した。

また八郎潟町真坂字沢田地内の沢田遺跡の発掘調査は、昭和31年秋田大学が主体となり実施され、 縄文中期全期間にわたる遺跡と確認されたが、近年、八郎潟干拓地の宅地造成(国営)に供する土採 りのため、地形が著しく変容し、現状保存が不可能なため、秋田大学が主体となり、緊急発掘調査を 実施することになった。しかし当該地はかなり破壊されており、十分な研究調査はできなかったが、 一応の成果を得、本報告書を刊行することができた。

研究者をはじめ、広く遺跡に関心をもっておられるかたがたに、これらの報告書をご活用くださるようお願いするとともに、調査にあたられた各位に対し、深甚の謝意を表する次第である。

昭和49年3月

秋田県教育委員会

教育長 山本 一

目

			分布調査報告書	
I 路	線の出		条件	
II 分	布	調	查	2
III 遣			跡	3
IV 紹	i		語	4
付 図	-			
一天	分の-	一路紡	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
	·竪穴2		(第2図)(1)~(5)·····	
			三真(第3図)	
			· 3 地点(第 4 図)·····	
遺物	加拓影	(第5	図)	13
沢田遺跡				
			こるまでの経過	
(二) 道	酸の値		地形	
(三) 多			查	
1	調査	01	冓 成	
2		屈 E	· -	
3			遺構	
4			<b>動</b>	
(			土製品	
Œ	万石	器·	石製品	2
(四)	ŧ	٢	Ø	2
図 •	写	真	目 次	
( [	☑)			
第		立	地 図	15
第:	2 図 5	遺跡	全体 図	26
第:			- ンチ南壁,北壁断面図	
第4	[図 -	一号信	主居址実測図	28

第5回 二号住居址実測図------29

第6図	三号住居址集	[測図
第7図	ピット断面	☑31
第8図	土 器 拓	本
第9図	土器実測	☑35
第10図	石器 実測	☑36
第11図	石器 実測	☑37
第12図	石器 実測	☑38
第13図	石器 実測	☑39
第14図	石器 実測	<b>3</b>
第15図	研磨円礫岩質	f 別分類表·······23
(写真)		
第1図	A, B, C	レンチの遠景と土器出土状態41
第2図	二号住居址,	石器出土状態,一号住居址の炉42
第3図	石	器 43
第4図	石 器・石製	
第5図	石 器・石製	[品45
第6図	土	器 46
第7図	土	器
第8図	土	器 48
第9図	土	器
第10図	土	器 50
第11図	土 器・土製	
第12図	土 製	品

# 鹿角大規模農道遺跡分布調查報告書

調查員 日本考古学協会員 奥山 潤 十和田高校教諭 大 里 勝 蔵 管 原 洋

# 前 文

この報告書は、昭和47年7月、秋田県と鹿角大規模農道遺跡分布調査団との委託契約により実施した調査結果に関する報告である。農道工事の一部は、調査開始以前の昭和46年中から始められ、その一部は図示したように完成している。

路線の計画線の通過する地域は、遺跡発見事情の特殊性を無視できない鹿角郡市内でも、特にその特殊事情が重大な条件となって、調査作業を困難ならしめている地域で、したがって工事施行にあたっては、この一過的調査に基づいて、万全と考える資料とすることができない。

この報告書が示す結果がもつ、最も主要な意味は、実にこの点にある。

(註)

(1) 東北縦貫自動車道遺跡分布報告書(十和田町・小坂町地区)秋田県文化財調査報告書 第20集 昭45.3 p2

# Ⅰ 路線の地理的条件

計画路線の地質事情については、路線全域にわたりほぼ同一であるが、地理的には多くの異なる情況を地点ごとに示している。この情況が遺跡の分布を左右することは、現代集落の分布事情とほぼ同様である。

鹿角市花輪の東北端近くから、北東方向に向う農道路線は、東側間近に迫る低夷山地の西麓を埋めた火砕流段丘の平坦面を通る。

猿平を通り同市大曲までは、標高ほぼ  $160 \,\mathrm{m}$ 、東側山地の蝕剝面との高差は $-50 \,\mathrm{m}$  である。この間の距離約  $1,500 \,\mathrm{m}$ 。

これより方向を北に転じ、柴内西町南端の県道花輪大湯線までは、既設道路であり、必らずしも本 格的な短絡道路ではない。

本格的直線コースは、柴内西町南端、県道より始まり、東南に約 750m を、段丘面を横断する。

これより方向をほぼ北に転じて約 1,000mは、山地の西端に接するが、さらに方向を北東に変え、山裾を高圧送電線沿いに約 900m、西側は一帯の有名なりんご園で、北東~南西に延びる段丘の横断幅が、800~ 900mに達する広大な平坦面である。

餅野と呼ばれるこのあたりから、路線は長野集落の西をかすめて、北微西にまっすぐ、約 1,500m、これまでと異なり、菩提野扇状地の西縁近くを延びる。この路線に沿い、湧泉ラインが並び、したがって間瀬川の谷や、根市川の支谷を横断する。標高約 155m。扇状地の構成物質は、言うまでもなく

# 礫層である。

路線は級ノ木集落の西縁をほぼ北に 400m, 次いで依然扇状地を横切って北北東に約 900mで十和田地区に入り,下草木の集落の西端をかすめて,根市川の南岸に沿い北東に方向を変え,川を渡って北に 600m,軍森と呼ばれる独立山地の東麓に達し,ようやく扇状地を離れ,北西に向け,標高 170~ 180mの丘陵の尾根を越え,再び根市川の上流の谷を渡って風張台地にのぼる。この距離約 100m。風張台地では国指定の遺跡「大湯環状列石」の北東約 500mを横断し,風張集落の西側を斜めに段

風振音地では国指定の遺跡「大湯環状列石」の北東約 500m を横断し、風張集落の西側を斜めに段 丘崖をたちきり、段丘中位面を通過する。此の間約 1,000m で大湯川の低位面に達する。地盤は十和 田火砕流である。

次に水田地帯,国道,大湯川を横断し,越廻集落の北東部に入り,段丘縁と並行にそのまま南西に延びる。ここは再び段丘面である。

大湯川の低位面の横断は約 800m, 腰廻以西 1,100m を測る。腰廻台地は, 大湯川低位面よりの比高約50m, 風張台地と同じ標高 180mの火砕流段丘である。

道はここから北西に向きを変えて段丘を横断、400mで声名沢の段丘崖を降り、谷を渡って下声名沢の集落より中位面を西に約700mで、長者久保、四ツ谷集落を経て小坂町の牛馬長根と呼ばれる山地の東麓を通り、牛馬長根の集落から小坂町荒川、大生手の両集落の間を抜け、毛馬内~小坂を結ぶ県道と連絡して終わる。この下声名沢~長者久保間の谷を渡って終点までの低い山地の路線は、北西方向から次第に西方向に向きを変え、この間約3,300mにも達するであろう。この間はほとんど未開発の地を工事することになる。標高約200mに達する箇所が多い。

以上のルートには、大湯川の低地帯、風張台地と扇状地間の山地、鹿角市北方の集落乳牛から南東 に向い、大曲の北で初めのルートと連絡する別ルートの案もあるようである。

すなわちこれらの路線の通過する地域は、大別して火砕流段丘、その谷に開けた水田地帯、扇状地、 大湯川の低位・中位段丘面、低夷な山地、段丘崖などの地形変化がある。

# II 分布調査

分布調査に当っては、一万分の一地形図に路線を記入したルートマップを用い、航空写真を併用したが、中心線に打たれた杭の両側約5 m ずつ、すなわち幅10mの区域中、歩行可能な地区のほとんどすべてを踏査した。

ただし水田中、あるいは既工区域は除外し、クマザサその他で歩行不能の区域は避けた。

先述のように、この区域の全域は、大湯降下火山灰層およびその二次層、低地帯は洪水シラスがおおい、深く耕起されるか、工事などによって、たまたま火山灰下の遺物が地表に現われている箇所以外は、全く遺物の露出を見ることはなく、また耕作の都合上、なるべく降下火山灰層を表土と混合しないように耕起する習慣である。

したがって、今回調査の長い路線は、幅約6 m~10mと限られた幅員であり、よほどの事情がない限りは、路線上に遺物の散布を望むことは不可能である。これは過去2年にわたり実施した幅4 kmの東北縦貫自動車道の調査においても実証されたことであり、そのためのデモンストレーションとして、

柴平字餅野の一地点で発掘を実施した。その結果は別に記載したとおりであるが、外表、遺物の散在 しない地点においても、竪穴などの遺構が存在することを立証し、地形、居住条件その他を考慮に入 れた考古学的判断の必要性を立証した。

また数回にわたりルート上を往復し、ボーリング棒を用いて、地中の埋蔵遺物を探索したが、前記 火山灰層が厚く、ボーリング棒を通さない地点が多く、この方法によることはほとんど効果を示さな かった。(第2図(1)参照)

以下発見地点について略記する。

# III 请 跡

# 付図·地名表·写真添附

# No.1 第1図1. 遺物拓影 (第5図)

測点NoR722よりNE方向に15mほど距てた段丘端部。予定路線よりわずかにはずれる。遺跡東側は急傾斜をなし、館状と思われる。

遺物は土師器?および焼成の悪い須恵器と考えられる数片で、土師器―須恵器使用の平安時代末期の住居址群と館状遺構と考えられる。〔地名表No.1. 鹿角市十和田上向字四ツ谷38 民有地 佐藤清一〕

# No.2 第1図2 第4図 遺物拓影(第5図)

館遺構の空濠であり、No.3 と相対する。 100m× 100mの平坦な畑地。予定路線の面より比高20m,中心線の北側。

空濠部分に直角に切断すれば館の時代が判明するはず。

遺物は縄文早期末の土器片および土師器である。第2図(5)に土師器写真を示す。〔地名表No.2 鹿角市十和田草木〕

# No. 3 第1図3 第4図 土器拓影 (第5図)

No.2遺跡の向い。測点No.333~No.335。

杭のSE方向。眼下に下草木の集落をみる。館に伴う棚列また住居跡群。〔地名表No.3 鹿角市十和田草木?〕

### No.4 第1図4 第4図

いわゆる風張台地の路線全延長である。大湯環状列石周辺の、環状列石墓群を遺した集団の数個に わかれた集落の存在は、その存在が考古学上当然予想されていることで、近ごろ周辺の竪穴群の多く を含む地域の工事消滅、加えて、列石に膚接した地域の地形変形など目に余る状態である。

# No. 5 第1図5

下草木部落南側の段丘一帯である。さらに南の級ノ木集落との間一帯には遺跡埋蔵の公算が強い。

### No.6 第1図6 第2図

デモンストレーションとして任意に実施した発掘により9世期後半,11世紀の間の竪穴群の存在が 確実となった。

第2図以下の写真は竪穴の全図、遺物の出土等を示す。

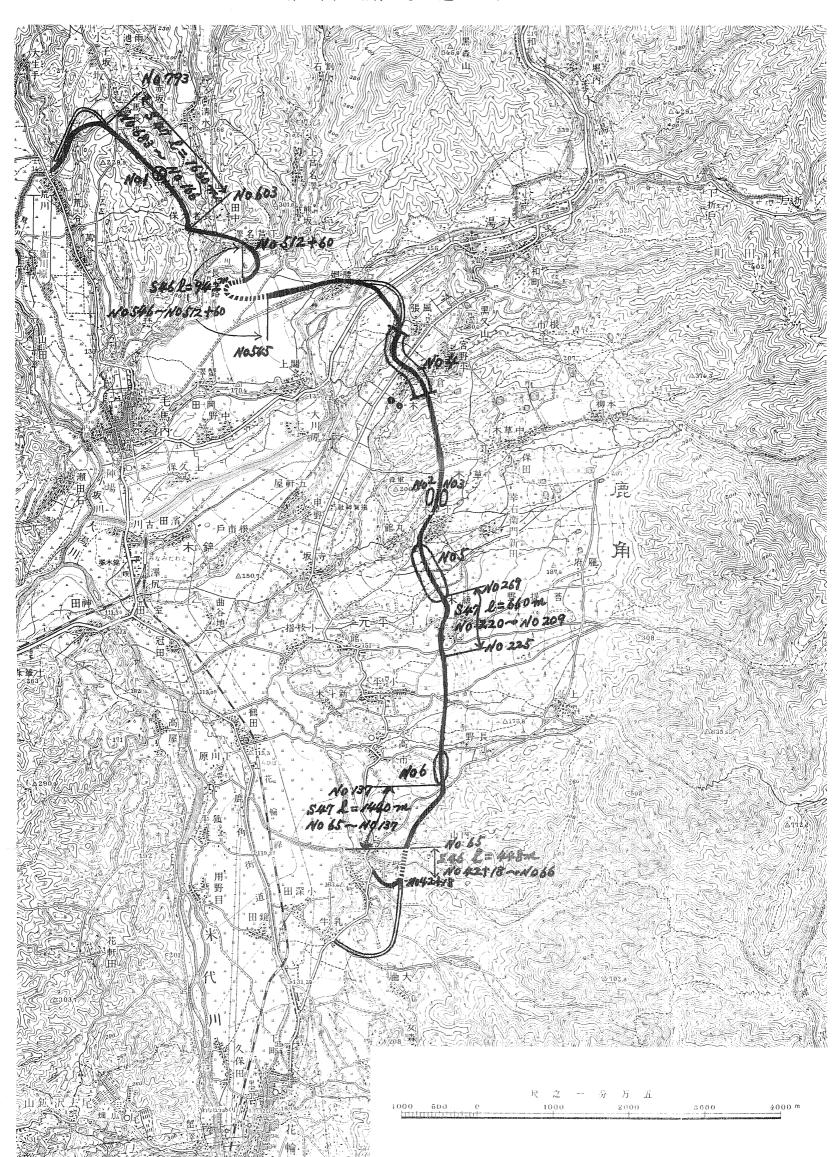
出土遺物は、木葉文底のある大型のカメ、ろくろ手法による内黒土師坏等多数で、目下十和田高校 において報告準備中である。

遺物写真は第2図(5)に掲げた。

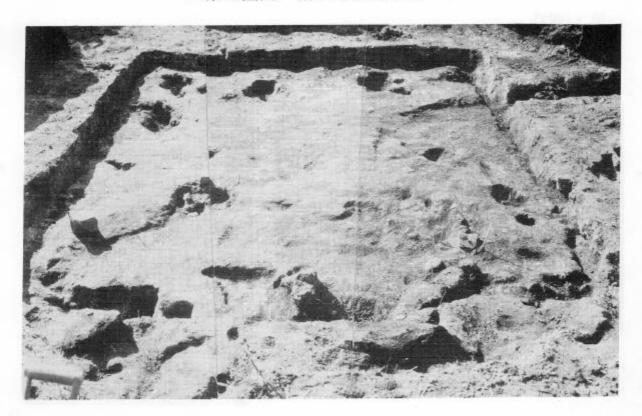
# IV 結 論

以上調査の概要に報告したように、今回の分布調査は、以下の結論をもたらした。

- 1 分布調査の場合, 地質条件の左右する要因はすこぶる大きい。特に火山灰が遺構や包含層のすべてをおおう場合, その地域が未開発区であるような場合は, 発見のないのが普通である。
- 2 特に幅員の定められた道路敷の場合、一定間隔の試掘を試みるより方法がなく、そのためにはばく大な日数と労力と費用を要するであろう。
- 3 上記2の場合でも、その調査区間は、全延長上に及ぶべきでなく、工事の年度ごとに区分して行なうべきである。
- 4 しかし餅野においてデモンストレーションの結果,竪穴を検出したことは,換言すれば,ほぼ全域にその可能性があると言える。
- 5 4の推論が極端であるにせよ、その可能性は、鹿角市史の遺跡の多密性にかんがみて、あえて過 大評価ではない。
- 6 以上により、工事前の点による試掘こそが遺跡保護の最適な方法である。
- 7 今般調査の路線上の遺跡は、点でなく"線"である。 この存在のしかたについて、工事施工者と調査者の連絡協議、説明の会議を持つことが望まれる。



第2図(1) 餅野試掘竪穴

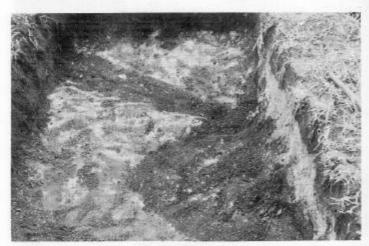




同土層斷面



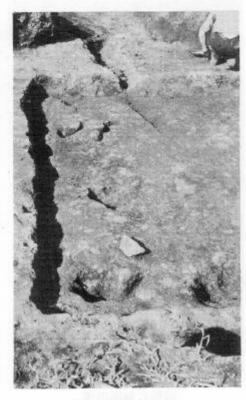
同竪穴輪廓出現



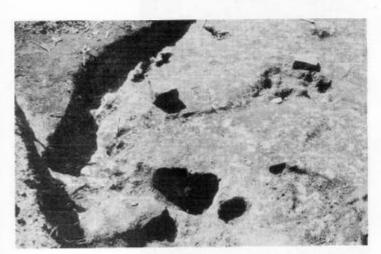
同竪穴輪廓出現



同竪穴外へ延びる溝



同西側床面

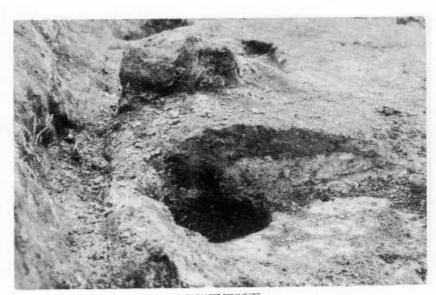


同南側の床面

# 第2図(3)



同床面の一部



同東側灰原断面

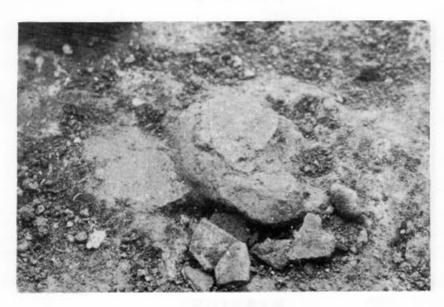


同土器出土状況

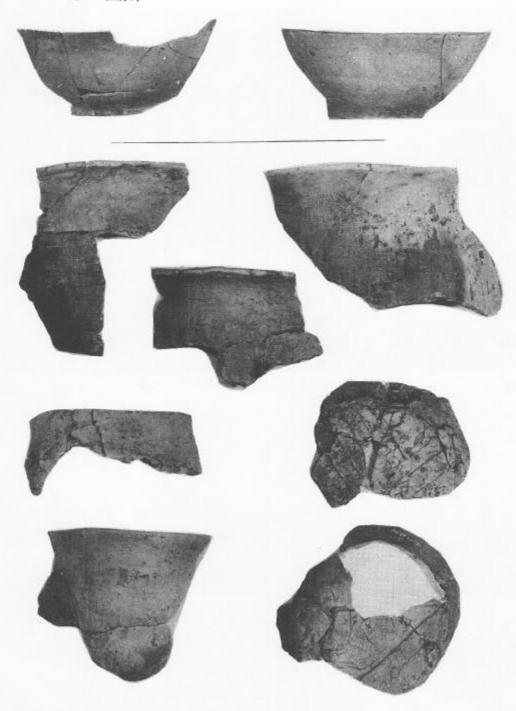
第2図(4) 餅野竪穴土器出土状況







第2図(5)



最上列 No.2 出土 以下3列 No.6 出土

第3図 下草木No.2, 3通過点 (2,3は空濠をへだて相対する)

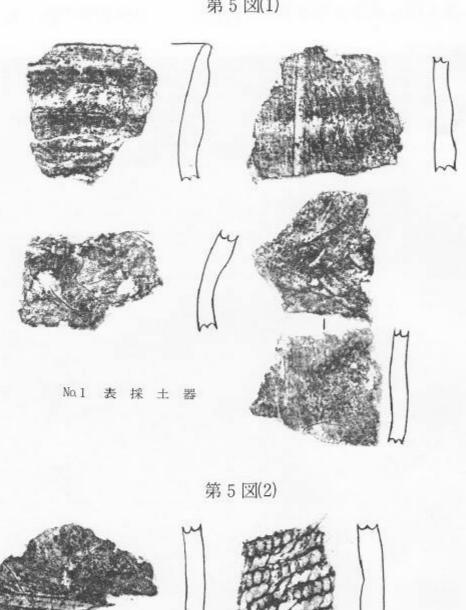




第4図 風張台地と丸館(中央下) Sは大湯環状列石



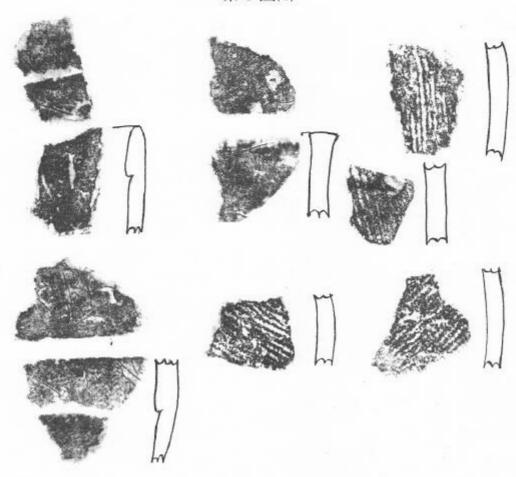
第 5 図(1)



第5図(3)



第 5 図(4)



No.3 地 点

# 沢田遺跡発掘調査報告書

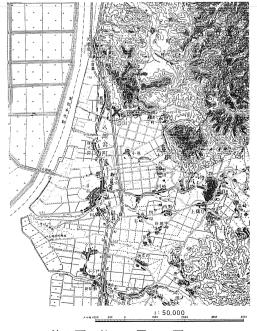
# (一)発掘調査に至るまでの経過

沢田遺跡一帯の段丘は八幡台と呼称され、明治時代から縄文時代の遺物を出土する土地として地域 の人々に知られていた。

昭和31年になって、八郎潟町教育委員会と秋田大学歴史研究室は段丘南斜面を真坂から五城目町に 至る県道直上の北斜面の二箇所にかけて10月に小発掘調査を行ない、遺跡は縄文中期全期間にわたる ものであることを確認したのであった。

ところが、その後の昭和45年秋ごろから、土砂採取が段丘東南斜面と西斜面において行なわれ、五城目方面から段丘の南東部分を横断し、高岡小学校の裏手に至る県道バイパス工事の計画がなされると土木業者の採土が活発化し、遺跡主要部分であると考えられる東側と南側の斜面がブルドーザーなどによって大幅に削り取られ、その土砂は高岡小学校との間にあった小さな沢や各地の埋め立て土砂として使用されたという。この工事はさっそく中止させられたが、昭和46年7月にこの遺跡破壊が朝日新聞に掲載された時は、すでに遺跡の主要部分と考えられる所は削り取られており、段丘は3分の1程度しか残っていなかった。その後県教育委員会では発掘調査を計画していたが、本年6月になって土木業者による採土の話しがあったため、県教育委員会、八郎潟町教育委員会の依頼によって、秋田大学歴史研究室が中心となり緊急発掘調査を実施したものである。

# (二)遺跡の位置と地形



第1図 位 置 図

本遺跡は(全国遺跡地図秋田18の442)秋田県南秋 田郡八郎潟町字沢田に所在する。

ここは奥羽本線八郎潟駅北方2キロメートルの高岳山南麓,八郎潟町立高岡小学校脇の標高29メートルの段丘上にあり、平地との比高は25メートルを数える。この段丘は八郎潟東部に連らなる出羽山地の末端に派生したもので、北方位にあたる背後は筑紫岳、高岳山にさえぎられ、前面には太平山塊から曲折流下して八郎潟に注ぐ馬場目川とその堆積作用によって形成された沖積地の水田地帯が展開している。

遺跡の所在する段丘は長径1キロメートルで東西 に広く張り出しており、沖積地までの間には三段の 段丘面を数え、これらは繩文時代各時期の旧八郎潟 の汀線と考えられるし、住居址が二層に重複してい ることや遺物の出土状況などからしても、往時の採 集経済の生活を営むには絶好の立地条件を具えていた場所と推定される。

遺跡の所在する最上位の段丘を構成する地層は、第一層0.2~1.5メートルに及ぶ縄文時代の遺物を 包含する黒褐色表土層、第二層は4~6メートルの厚さをもつ黄褐色粘土質火山灰土、第三層は厚い 砂質の潟西層となっている。

本遺跡の周辺には、馬場目川のすぐ南の沖積地に秋田旧城と推定される石崎遺跡、やや上流の五城 目地内には明治年間に晩期の優品を出土した中山遺跡、ならびに平安期の岩野山古墳群、また、井川 村には弥生時代の新間遺跡が立地している。

# (三)発掘調査

# ①調査の構成

期日		秋田大学歴史研究室学生	石川 誠子
昭和47年7月17・18日		11	赤塚 ヒナ
昭和47年7月26日~30日		"	和知 敦子
調査主体		<i>II</i>	佐藤まつみ
秋田県教育委員会		"	山本 玲子
八郎潟町教育委員会		"	三浦佳代子
調査員		"	村岡百合子
秋田大学教授	半田市太郎	"	野上 剛志
秋田大学教授	新野 直吉	県立五城目高等学校生徒	金子 美和
東北学院大学教授	加藤 孝	11	伊藤 広孝
県立五城目高等学校教諭	門間 光夫	. #	伊藤さつき
本荘市立石沢小学校教諭	伊藤 種秋	"	沢田石ユオ子
秋田市立高清水小学校教諭	岩見 誠夫	<i>"</i>	一関 祐子
山本郡山本町立金岡小学校教諭	永瀬 福男	"	小玉 薫
本荘市立北中学校教諭	佐々木 隆	<i>"</i>	山村 朋子
調査協力員		"	畑沢 典子
秋田大学歷史研究室学生	安藤麻須子	11	伊藤 明美

# ② 発 掘 日 誌

### 7月17日(月) 小雨

午前11時,新野直吉,加藤孝両先生の指揮のもとに,秋田大学歴史研究室学生9名と伊藤種秋,永瀬福男,岩見誠夫でもって,段丘北斜面に2メートルの規模のAトレンチ,Bトレンチを設定して予備調査の発掘を開始する。

午後から県立五城目高等学校教諭門間光夫,越前正己両氏と、同校生徒6名が発掘に参加し、段丘南斜面のブルドーザーによって削り取られてできた崖面に竪穴住居址断面のあらわれているすぐ上に

Cトレンチを設定し、発掘にとりかかる。Aトレンチから滑車型の耳飾が出土した。

7月18日(火) 曇

昨日のメンバーでA, B両トレンチと南斜面のCトレンチを発堀, A, B両トレンチからは大木9, 10式類似文様をもつ土器片が出土する。Cトレンチからは竪穴住居址の炉と考えられる焼土が検出され, その上に赤褐色に焼けた円筒土器が伏した状態で出土し, それを半円状に囲むように浅い柱穴が見つかった。午後は各トレンチの実測を行なう。

### 7月26日(水) 晴

午前9時,半田市太郎先生,門間光夫,伊藤種秋,永瀬福男,岩見誠夫,五城目高校生7名で,17,18日の予備調査を引き継ぎAトレンチ,Bトレンチの発掘を行なう。Bトレンチの第二層褐色粘土質土から石鏃や個体を成すと考えられる土器片が多量に出土した。大部分は円筒上層式のものである。 母ごろ,八郎潟町教育委員一行が見学に来跡。

Aトレンチ, Bトレンチ間の幅1メートルの壁の間に1ピットが検出され、その埋土から長径6センチほどの三脚石器が出土した。

# 7月27日(木) 曇

昨日多量に土器片の出土したBトレンチ第二層から、底部付近の欠損した大木9~10式類似文様を有する土器が出土。Aトレンチ、Bトレンチ間の壁を取り去り、昨日三脚石器の出土したピットの掘り込みを調査したが、底の方からさびた針金が出土し、その下から丸太の腐蝕した残りがあらわれたので、かって県道ぎわにたてた電柱のささえのための土拡と判断する。

10時、本荘市立北中学校の佐々木隆氏発掘に参加。Aトレンチ、Bトレンチの断面実測を完了する。 午後から段丘南斜面の住居址の検出されたCトレンチを北側に拡張する。その際時代の下がる須恵 器片が一片出土した。

### 7月28日(金) 晴のち雨

本日よりCトレンチ竪穴住居址の方の作業にとりかかる。予備調査で検出された住居址床面の清掃と平板測量を行なう。

午後は崖の法面にあらわれている層位を参考に、下位の住居址面を調査すべく掘り下げる。地盤である粘土質火山灰土に掘り込んだ下位の住居址床面までは、埋めたてられた小ブロック状に分離する 黒褐色の有機質土を含んだ粘土質土で、出土する遺物は細かく砕けた土器小片で、部分的に焼土塊が 見られた。

4 時過ぎ、住居址の床面と考えられる粘土質火山灰土の面を半分ほど露呈させるまでに作業が進行し、その部分に浅い柱穴と大きなピットと考えられるものが各二個検出された。

### 7月29日(土) 晴のち雨

住居址すぐ西側のブルドーザーに削られて出来た崖面にあらわれている袋状のピットを調査する。 ピットは全体の3分の1程度より残存しておらず、中に充満しているものは、ブロック状の粘土質火 山灰土と石器製作の際にできる薄片と黒耀石小砕片、木炭片であった。これは掘り込み状態から見る と、Cトレンチ上位の住居址と同時のものと判断された。深さは残っている部分で1、2メートル位 である。 このピット調査と同時に下位の竪穴住居址の精査をする。東側の床面附近から、土塀用具とみられる角材状の一端のとがった石器が出土。

昨日発見された竪穴住居址床面内のピットは袋状をなしており, うち一つは3分の2ほど下の方で 段状をなしていた。ピット内からは円筒上層A式の土器片や木炭片, 灰を含んだ土などが出土した。

午後はトレンチの平板測量と段丘全景測量にとりかかったが、おそくなって小雨となったため作業 は完了できなかった。

7月30日(日) 晴

段丘全域の実測と、Cトレンチの全景撮影をし、11時発掘調査を終了する。

# ③ トレンチと遺構

(トレンチ)

調査のため設定したトレンチは、北西斜面のAトレンチ、Bトレンチ、南斜面の竪穴住居址の検出されたCトレンチの三本である。

北西斜面のトレンチは、幅1メートルの壁を隔てて設定した2×3.5メートル規模のものである。 両者とも第一層の黒色表土が土砂採取によって消失しているが、斜面の下部が厚く、第二層の黒褐色 土、第三層の褐色粘土質土が遺物包含層である。

第二層からは大木 9,10式類似文様をもつ土器片や沈線文を有する土器片が出土し、第三層からは 円筒上層 B, C式の土器片が多く出土した。

南斜面のCトレンチは当初6×3メートルの規模であったが、のちに北東に拡張した。この地区はブルドーザーによって畑の表土の大部分は削り取られており、斜面の上部の方は地盤である粘土質火山灰土の露呈が多かった。このトレンチからは、プランははっきりしないが、円筒上層A式期の竪穴住居址が発見された。上位の住居址は下部の住居址を埋めたてて作ってあり、下部の住居址内には炉と考えられる焼土、径1メートルのピット2があった。

(遺構)

A, Bトレンチ

Aトレンチの南隅から滑車型耳飾と、朱の付着した大木10式類似文様をもつ土器片が出土し、墓拡の存在が考えられるためトレンチを拡張調査したが、遺構は発見されなかった。

Cトレンチ

第一号住居址(第4図)

ブルドーザーに削られ、トレンチにわずかに残っていた黒色土を取り除いた時に検出されたものである。崖際に 120×85センチメートルの規模で楕円状の焼土があり、その上に円筒上層A式の土器が伏せた状態に赤褐色に焼けて存在した。この炉と考えられる焼土をとり囲むように、径20~30センチメートル、深さも同程度の柱穴が検出されているが、炉の南西側の部分がブルドーザーに削り取られているため、プランははっきりしない。床面から緑色がかった流紋岩製の穿孔のある垂飾品が発見された。また、後期初頭と考えられる沈線文のある土器片が少量発見されているが、上部からの流入品と考えられる。

トレンチ西北端の崖際に露呈している袋状のピットは、半分しかないが、(第7図3) 残存最大径は75センチメートル、深さは115センチメートルで、埋土はブロック状にくずれる粘土質火山灰土と有機質黒色土であり、繩文の施文された土器細片と石器製作の際にできる薄片、黒耀石小片がその中に含まれていた。ピットの上位レベルが床面のレベルと一致していたので、この第一号竪穴住居址の時期のものと考えられる。

### 第二号住居址

第一号住居址の下30~40センチメートルの深さに存在する粘土質火山灰土を掘り込んで作った竪穴住居址で、第一号住居址同様ブルドーザーに削り取られて、3分の1程度しか残っていない。

トレンチ南東側に径6~7メートルに及ぶ円孤を描く柱穴列が存在し、これから推察するとこのトレンチ内の住居址は二軒分とも考えられるがはっきりしない。

中央に炉と考えられる 120×40センチ規模の焼土が残存しており、石囲いなどの施設はなかったが、 やや離れた所に土器が一個埋められていた。

竪穴の壁に沿い大ピット二個が存在した。このピット北西側のものは、長径1メートル短径80センチメートル、深さ80センチメートルである。深さ60センチメートルの所に足がかりのような段状のとび出しがあり、この深さまで上位の竪穴住居を作る際に埋めたてた黒色土の混じったブロック状に分かれる粘土質火山灰土が存在し、以下は灰、木炭片焼土、円筒上層A式の土器片の混入した密度の小さい土が存在した。

南東側のピットは、長径1メートル、短径75センチメートル、深さ65センチメートルのもので、40センチメートルほどの深さの所までの埋土には、小石、木炭片、縄文のみの土器片がまじっていたが、以下は全面チョコレート色の堅くしまった土であった。

### 付記

# 第三号住居址(第6図)

Cトレンチの東側,ブルドーザーに削りとられ粘土質火山灰土の露呈している箇所に残っていた柱 穴群である。現存している柱穴の深さは7~10センチメートルで、柱穴の並びぐあいから歴史時代の ものかとも思われるがはっきりしない。

## ④ 出土遺物

# ① 土 器, 土製品

### 土器

出土した縄文土器片は、小型のダンボールで6箱の量である。これは縄文時代中期前半から後期初頭に及ぶものである。

第一類土器 (第8図1~6, 写真第6図1~5)

円筒器形で口縁は波状をなすものが多く、頸部をめぐる一条の隆帯との間が文様帯である。ここには平行もしくは波形に走る撚糸や絡条体の圧痕文があり、口唇部や隆帯には繩文が押捺されている。 胴部には地文として斜繩文の付されているものが多い。

a群(第8図1, 2 写真第6図1, 2)

口縁は波状をなし、波頂部から一条もしくはY字状の隆帯が下がり、口頸部の文様帯には平行もしくは波形の撚糸文のある土器である。

b群(第8図3~6 写真第6図3~5)

平行に走る文様の原体が絡条体によるものである。

この類の土器は器壁の厚さ1センチメートル前後のものが多く、Cトレンチ出土のものである。

第二類土器 (第8図7, 8, 第9図5 写真第6図6, 7, 第11図4)

a群(第8図7, 8 写真第6図6, 7)

波状口縁で、文様に縄文原体を弧にして押捺した馬蹄形文や隆帯のよりいっそうの発達の見られる ものである。

b群(第9図2, 第9図5 写真第11図4)

口縁の平らな円筒器形の土器で、口縁部分に蛇行する縄文を押捺した粘土紐のはりつけがあり、胴部に斜縄文が付されている。

第9図5,写真第11図4は、器高29センチメートル、口径24.5センチメートルのもので、土器の破損修理のためか口縁に近い部分に二孔がうがたれている。

写真第9図2は、器高27センチメートル口径23センチメートルのもので、胴下半は火にかかったため赤褐色に焼けている。

第三類土器 (第8図9~11 写真第6図8~13)

a群(第8図9 写真第6図8)

器形文様の構成は第二類土器 a 群と同じであるが、その文様の馬蹄形文が半裁竹管状のものによる施文や、隆帯上の縄文が刻み目に変化しているものである。

b群(第8図10, 11, 第9図2, 6 写真第6図9~13, 第8図1, 2)

縄文による文様がなく、帯なる直線や曲線による粘土紐の貼付けによるものである。

第9図2, 写真第8図1は, 口径29.5センチメートル, 器壁の厚さ7ミリメートルで, 表面は火にかかって赤褐色を呈し, 内面は黒褐色である。

第四類土器(第9図1 写真第9図1)

この土器は口径19.5センチメートル,で胴下半は欠損している。口唇には指の押しつけによるゆるい凹凸があり、その下に一条の器をめぐる粘土紐が付されている。頸部に撚糸による渦巻文があり、胴部は火にかかった痕跡がある。胎土には砂粒を含んでいる。

第五類土器 (第8図12~17, 第9図4 写真第6図6, 第7図1~6, 第10図1)

沈線や隆帯による渦巻文が特徴的な仲間である。第9図4,写真第10図1の土器は、口径23センチメートル、器高26センチメートルのもので、口縁部の取手状の飾りに沈線による渦巻文、胴部にコの字形の沈線が走っている。

第六類土器 (第8図18~25, 第9図3 写真第7図7~12, 第10図2)

器壁の厚さが8ミリメートルほどで、擦消の手法が見られ、沈線によって画された中に縄文の残っている土器である。第8図21、24、25のように沈線の内外面に刺突文のつけられたものも存在し、刺突文は細い棒状で右下の方から突き刺したものである。

第七類土器 (第8 図26、27、28、34 写真第7 図13、14、16、17、18)

いずれも少破片のもので、出土量も少なく、みがかれた土器面に木葉状文が沈線で描かれているものである。

第八類土器 (第8図31 写真第7図19)

Cトレンチ出土のもので本一片だけである。円弧と放射状線が文様として描かれている。

第九類土器 (第8図30 写真第7図21, 22)

網目状文の施文された土器である。

第十類土器 (第8図29 写真第7図20)

頸部にくし目状の文様の施文されたものである。

第十一類土器 (第8図32, 33 写真第7図15)

条痕文の土器片である。

以上述べてきた土器のうち、第一類土器は円筒上層A式、第二類土器は同B式、第三類土器は同C式、第四類の土器は第三類に近い時期のものと思われる。

第五類,第六類の土器は、中期末か後期初頭のころと考えられるもので、第六類は大木10式に近い時期のものと思われる。

第七類, 第八類土器は, 筆者の知見では海岸部の中期の遺跡に時々見られるもので, 新潟県方面の 土器の影響を受けたもののように思われる。

### 土製品

三角土製品(第9図1 写真第11図1)

Bトレンチ出土のもので,一辺 4.5センチメートルの三角形をしており,厚さは中央部で1センチメートルである。

土偶(第9図2 写真第12図1)

Aトレンチ出土のもので、身体に刺突文があり、両腕と胴部下半が欠損している。

第9図4ははっきりしないが、土偶の脚部と思われる。

円板状土製品(写真第11図2)

土器の破片を利用した径4センチメートルのものである。

土製管状玉(第9図6)

長さ3センチメートル、最大径 2.5センチメートルの細長いもので、中央に径1センチメートルの 一孔が通っている。

そろばん玉状土製品(第9図5 写真第12図2)

表面がきれいに研磨されたもので、中央に径 1.2センチメートルの一孔が通っている。

滑車型耳飾 (第9図3 写真第12図3)

径 4.5センチメートル, 厚さ 1.8センチメートルのもので, 両面に刺突文が施こされている。

### ① 石 器・石製品

石鏃(第10図1~15 写真第3図)

大きく分けて、有柄のもの(1、2)と無柄のもの(3~15)の二種類に分類することができる。

無柄のものを細分すると、三角形の底辺が直線に近いもの(3, 4)と、底辺部の中央にえぐりのあるもの( $5\sim15$ )に分けることができる。

石質は3が流紋岩、他はチャートである。4,13,15の石鏃には、アスファルトが付着していた。アスファルトの付着している石鏃が、すべて無柄である点が特徴的である。

石匙 (第10図16, 17 写真第3図)

いずれも、縦形で剝片の基部の両端を打ち欠き、つまみ部をつくっている。16は先端部が欠損している。石質はいずれもチャートである。

石錐(第10図18)

剝片の両面に二次加工を施し、ていねいに整形している。石質はチャート。

石箆 (第10図19~26, 29 写真第3図)

ほとんどが両面加工を施して整形している。24のように小形のもの。29のように大形のものなどがある。石質は26が硬質泥岩。他はチャート。

その他の石器 (第10図27, 28, 30, 31 写真第3図)

27、28は断面が厚く、棒状を呈する。切る、削る、突くなどの用途には適していないように思われる。用途不明。石質はチャート。

30は石鏃とも考えられるが、先端部は鋭利さに欠け、突き刺さる機能を十分、発揮できないと思われる。石質はチャート。

31は両面加工で、バナナ状に湾曲している。ナイフとして使用したと思われる。石質は泥板岩。

制片石器 (第10図32~36, 第11図37~41 写真第3図)

剝片の先端部や片縁に加工を施し、刃部をつくり出したもの、第一次剝離でできた縁辺を刃部として使用したと思われるものなどがある。石質はチャート。

三脚石器 (第11図42, 43 写真第4図3, 4)

扁平な礫の両面に三方向から粗い剝離を施し、三つの脚と内湾する三辺をつくり出している。石質は42が流紋岩。43が硬質泥岩。

穿孔ある石製品 (第11図44~46 写真第4図1,2,5)

44は孔が二つあるが、孔の一部が欠けている。これは、礫の下半部が欠損しているためである。孔 の直径は5ミリメートル。石質は安山岩。

45は扁平な礫の先端部近くに一孔をうがっている。孔の直径は3ミリメートル。石質は泥板岩。

46は薄緑色の流紋岩で、ほぼ中央に5ミリメートルの孔をうがっている。礫の周縁は研磨されている。これらの穿孔ある石製品は首などの垂飾品として用いられたと思われる。

刻線礫 (第11図47~49 写真第4図6,7,8)

礫の一端に刻線をめぐらしたもの(47)、礫の肥厚した一端に楕円形の刻線を施したもの(49)、栗の 実状の礫の中央部に3本の刻線をめぐらしたもの(48)とがある。刻線の巾、深さとも1ミリメート ル以下である。石質は47が安山岩。48、49がチャートである。

石棒 (第12図50~52 写真第4図15, 16, 17, 第5図15)

50は凝灰岩で表面が浸蝕され、一端が欠損している。51は表面が研磨されており、石棒の破片と思

われる。52は表面が研磨され、両端が欠損している。51、52の石質は安山岩。60は先端のとがった不 定形の安山岩。土掘り用具として使用したものでないかと考え、取り上げてみた。

使用痕のある礫(第12図53~55 写真第4図13,14,18,19)

球、棒状、扁平な礫の一端、または一側縁を使用して、物を打ちつぶす道具として使用されたものと思われる。重量、握りぐあいが手ごろである。石質は53がチャート、54、55は安山岩。

石錘 (第12図56~58 写真第4図10, 11, 12)

扁平な河原石の両端を打ち欠き、えぐり込みを施したもの(56,58)、礫の四端に粗いえぐり込みを施したもの(57)がある。石質は56は砂岩、57、58は安山岩。

砥石 (第12図59 写真第5図13)

厚さ45ミリメートルの砂岩、表裏に二本の条溝がある。条溝は幅4ミリメートル、深さ2ミリメートルぐらいである。

石皿 (第13図61~63 写真第5図14, 16, 17)

61は形が整っていないが表裏ともすり減っていて、使用の痕跡は明瞭である。石質は凝灰岩。62は 安山岩質の楕円形の礫で、中央が凹められた皿形の石器である。63は縁を有し、裏面には短い脚を有 する石皿の破片である。石質は凝灰岩。

研磨円礫 (第13図64~67 写真第5図1~12, 第14図)

今回の発掘で得た研磨円礫は 135個に達するが、そのうち4個を図示した。

出土状況は土器片とともにトレンチ内から均一的に散出し、集中的に出土することはなかった。 礫の岩質は、チャート、花崗岩、凝灰岩、閃緑岩、泥板岩、安山岩の順で、その総量は礫の95%を 占める。

礫の重量は、40~ 180グラムの範囲のものが多く、300~ 480グラムの礫も6個ある。

礫の大きさは、ほとんど $32\sim64$ ミリメートルの小礫で、それも $40\sim48$ ミリメートルのものが多い。

礫の形は、球形、卵形、ラグビーのボール状のものや、や や扁平な球形のものがある。これらのうち、球形と卵形が多い。

加工の度合いを見ると、大部分は球形、卵形もしくは、ラグビーのボール状の円礫の凹凸だけ丁寧に平滑にすりみがいている。

研磨円礫の用途については、腕力による獲物への投てきが多かったと思われる。また、400グラム以上のグループは、獲物を追いつめたとき、至近距離から投てきし、しとめる場合使用されたのではないだろうか。このグループには、相対する両端に敲打による使用痕と認められる礫が2個ある。石皿で堅実をたたき割ったときの使用痕と考えられることから、流用の一例と思われる。

第15図 研磨円礫岩質別分類表

石		質	個	数	百分率	
チ	チャート			9個	36.3%	
花	崗	岩	2	6個	19.2%	
凝	灰	岩	19個		14.1%	
閉	緑	岩	16個		11.9%	
泥	板	岩	10個		7.4%	
安	Ш	岩	9個		6.7%	
石		英		2個	4.4%	
砂		岩		2個		
流	紋	岩		1個		
不		明		1個		
合		計	13	5個	100.0%	

# (四)ま と め

沢田遺跡の存在は割合に古くから知られていた。森山、筑紫岳山麓を五城目町から八郎潟町真坂へ通ずる道路になだらかに南面している丘陵地帯を俗称「八幡台」と呼んでいる。この丘陵地帯の一部、高岡小学校に接近する部分が沢田遺跡である。古くから縄文中期の土器、石器が表採されていたことから、住居址も必ず存在するであろうことが予想され、組織的な発掘が期待されていた。昭和31年10月22日から24日までの3日間、「縄文中期文化の編年的研究」を目的として、秋田大学の今村義孝、半田市太郎両教授指導のもとに、秋田大学歴史研究室と八郎潟町教育委員会が中心になって発掘調査が行なわれた。この時の調査報告はすでに参加者のひとり、岩見誠夫氏が「秋大史学」(16号、1968、12月刊)に「南秋田郡八郎潟町沢田遺跡調査報告」として記載している。出土遺物の大半は現在秋大歴史研究室で整理保存しているが、その後本遺跡はほとんど忘れられた状態になっていた。このたびバイパス工事と、宅地造成の土採りのため遺跡が破壊される恐れがあるため、八郎潟町教育委員会が中心になり緊急発掘調査をすることになったが、すでに遺跡の大半は削り取られたあとで、かつ調査期間が短かく、予算不足等の悪条件のため十分な調査解明は不可能であった。しかし現状から考えて今回の調査は本遺跡に対する最後の組織的調査であったと思われる。

縄文中期全期間にわたる県中央部における数少ない遺跡で、出土遺物も多彩であったが、石器では 三脚石器それに三角土製品(秋田市四ツ小屋下堤遺跡からも5,6個出土している)、またこれまであ まり注意の払われなかったと思われる数多くの石弾、そして滑車状ペンダント等を出土したことは本 遺跡の特徴の一つであろう。

住居址の柱穴も発見されたが、ブルドーザーのため削り取られた部分が多くそのプランを確認するまでに至らなかったことはまことに残念である。最も条件のよい場所の表土が削り取られたあとであったため部分的発掘では発見も不可能に近かった。あるいは隣接する地帯で今後発見される可能性があるかも知れない。ともあれ、今回の調査を手がかりにして県中央部における縄文中期の遺跡が破壊される以前に調査され、その性格が記録されることを期待してやまない。

### ●引用参考文献

○日本の考古学「縄文時代」 河出書房新社刊 昭和40年7月

○秋田県の考古学(奈良修介,豊島昻著)吉川弘文館刊 昭和42年2月

○土偶(江坂輝弥著) 校倉書房刊 昭和45年8月

○石神遺跡(江坂輝弥編) ニューサイエンス社刊 昭和44年6月

○概報 下堤遺跡(第三次,第四次)秋田市教育委員会

秋田考古学協会刊 第三次 昭和46年1月 第四次 昭和47年1月

○遺跡発掘調査報告書(神沢海岸遺跡,船岡台遺跡)

本莊市教育委員会刊 昭和46年1月 協和町教育委員会刊 昭和43年8月

○米ケ森遺跡発掘調査報告

# ●報告書の作成分担

(→), (≡) ①, ②, ③

(二)

(三) (1)

(<u>=</u>)

(四)

図は各担当の執筆者, 写真は

 岩
 見
 誠
 夫

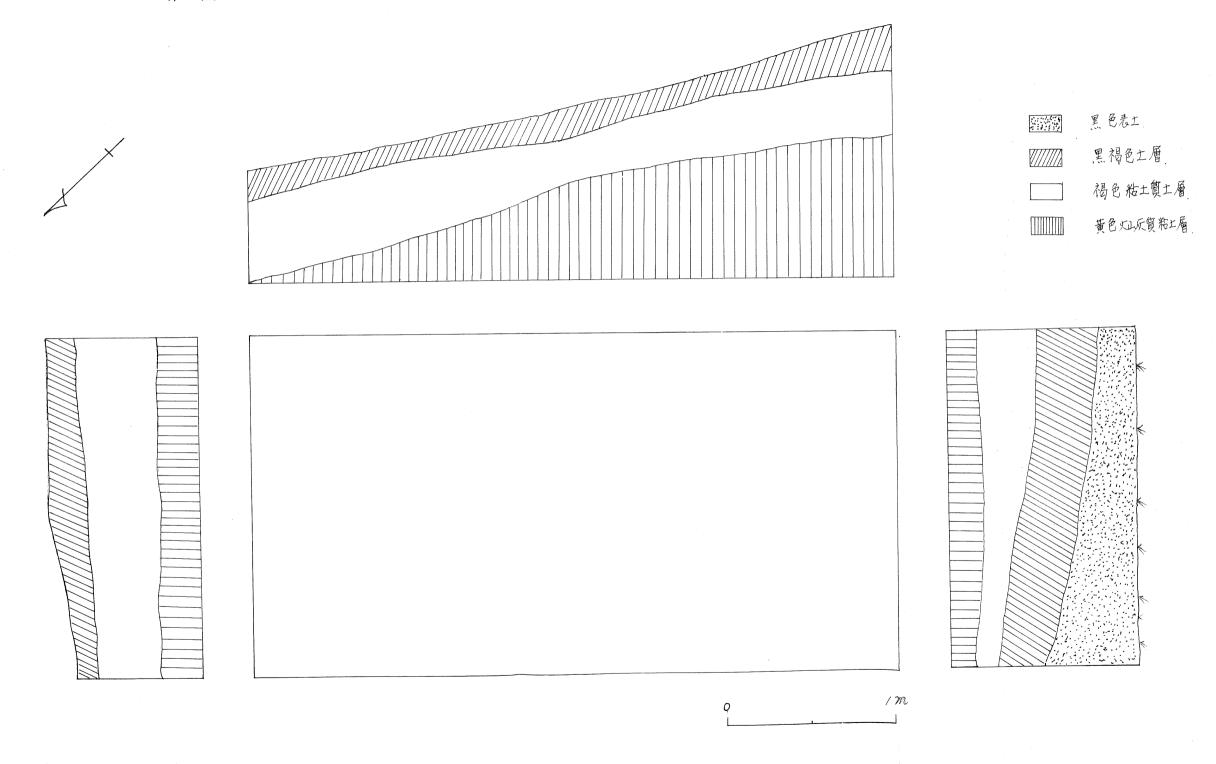
 佐々木
 隆
 秋
 我

 財
 瀬
 福
 男

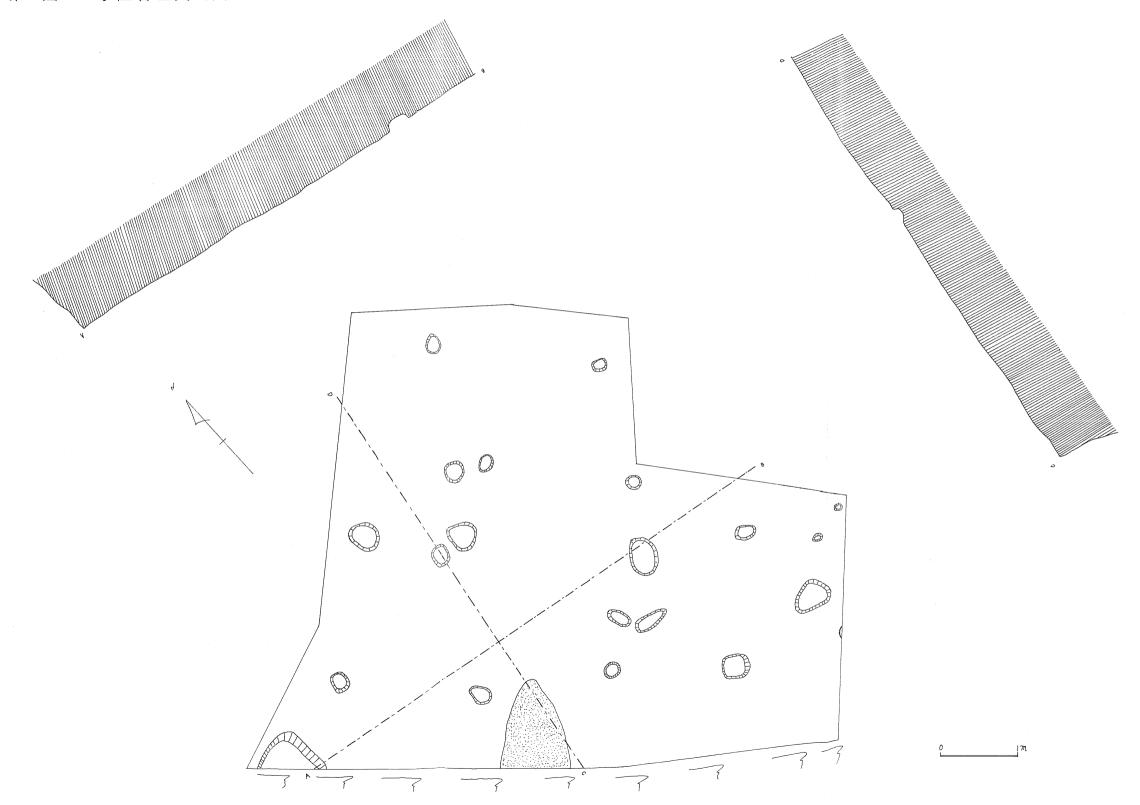
 門
 間
 光
 夫

岩見誠夫

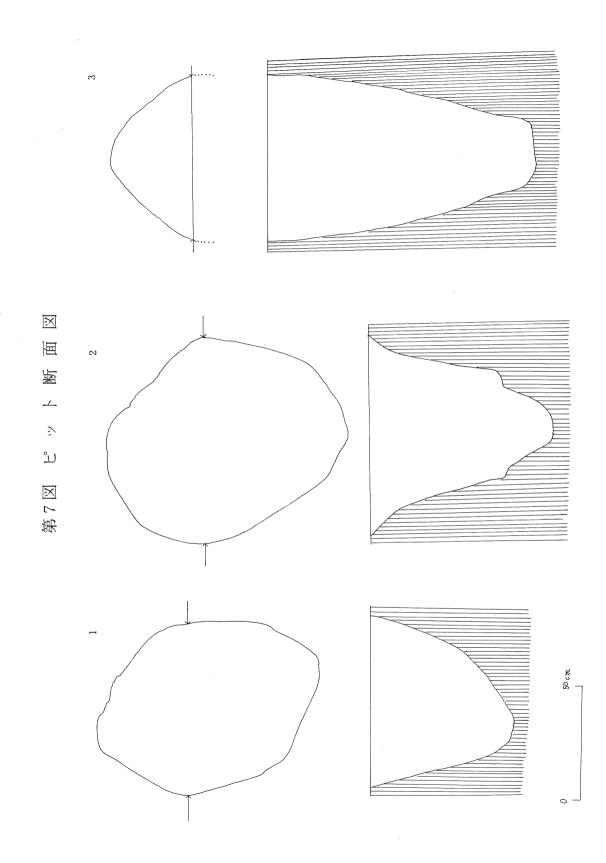
県道. 至真灰部署。 至五成月町。 28.5 m 29.0m 20m — 26 —



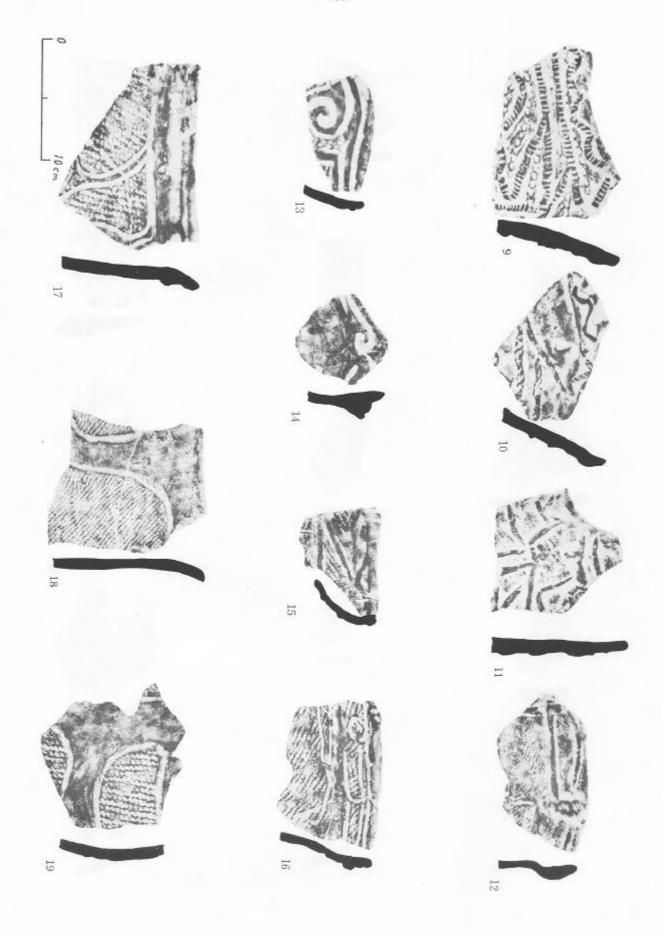
第4図 一号住居址実測図

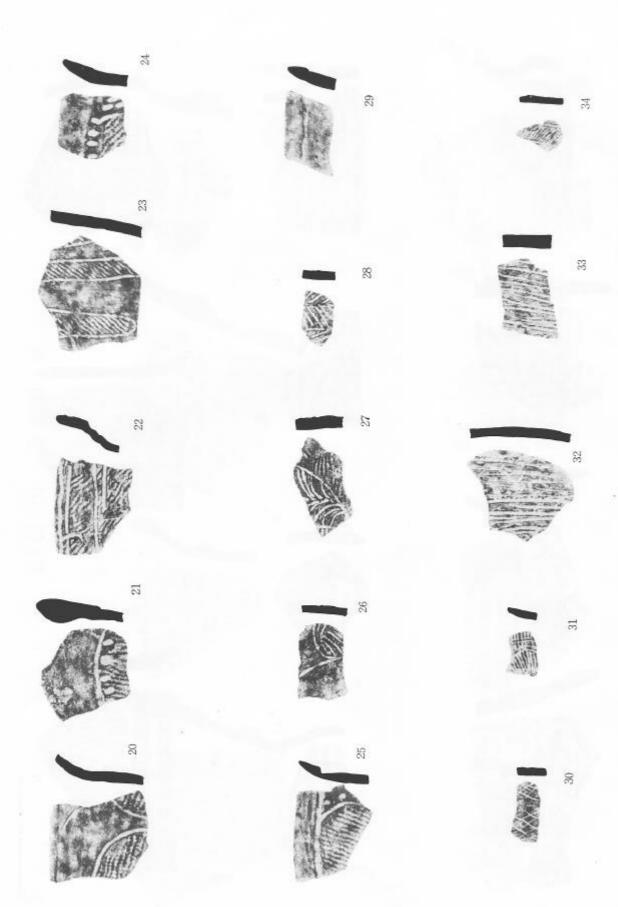


第5図 二号住居址実測図



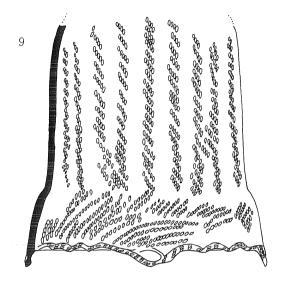


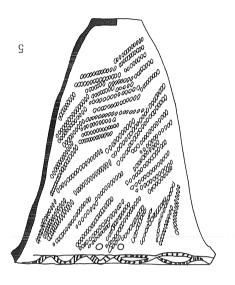


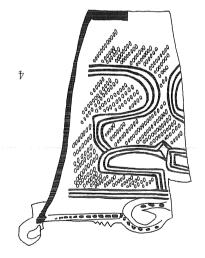


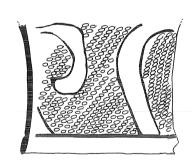
#### 図順業器土図6第





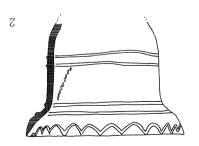


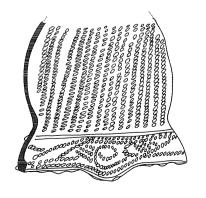




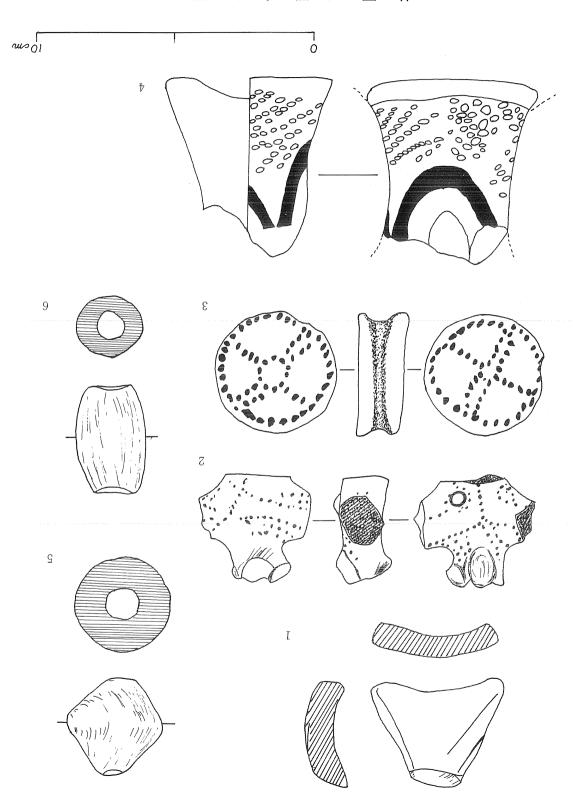
3

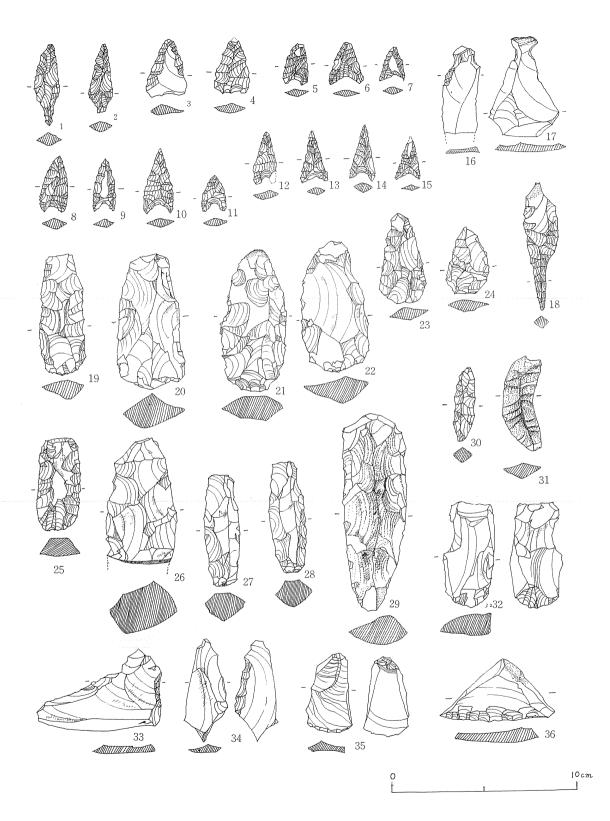
Ţ





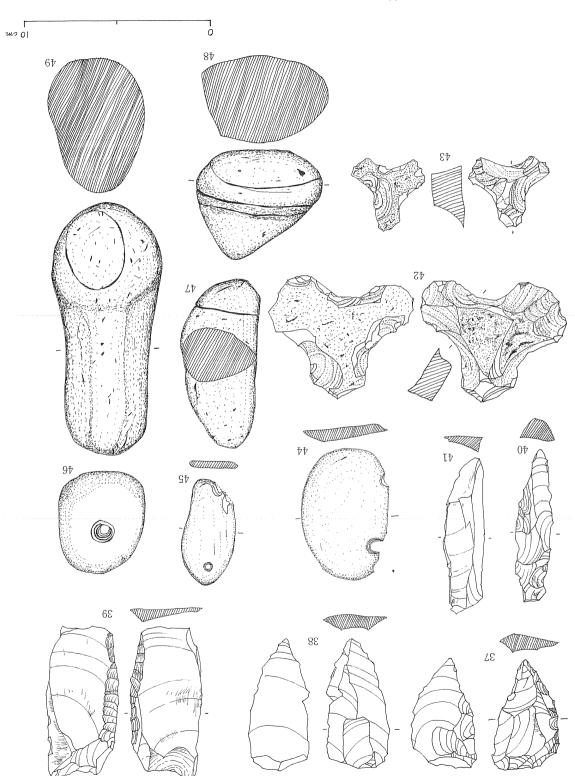
## 図 順 実 器 ひ 図01第

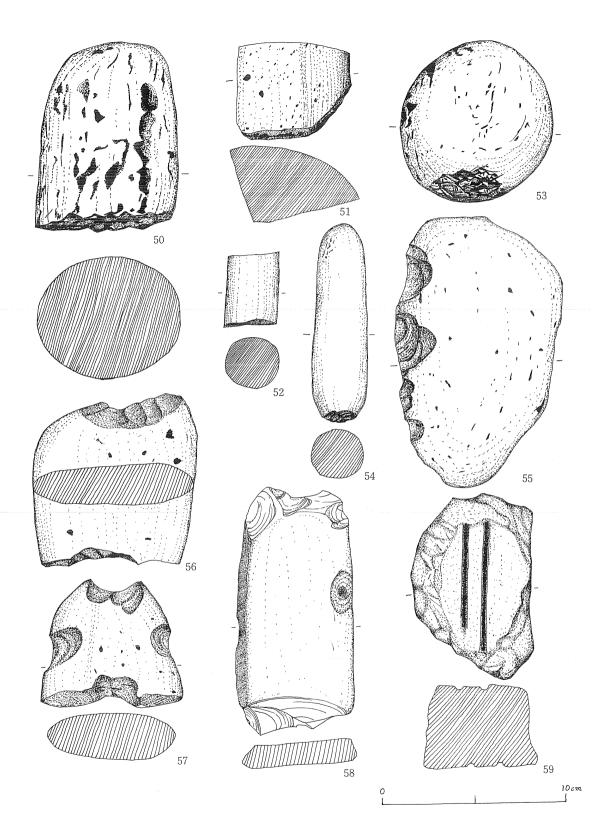




第11図 石 器 実 測 図

# 図順業器 図2.1第





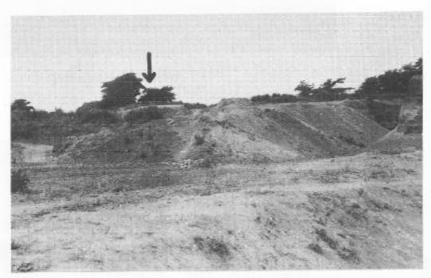
第13図 石 器 実 測 図

第14図 石 器 実 測 図

# 第1図



1. A, Bトレンチ遠景

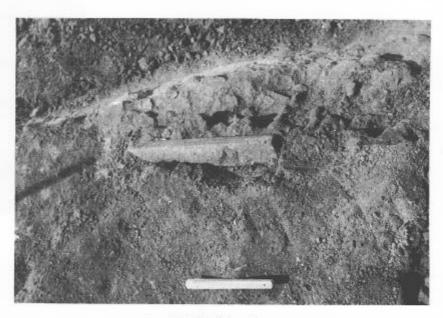


2. C トレンチ遠景

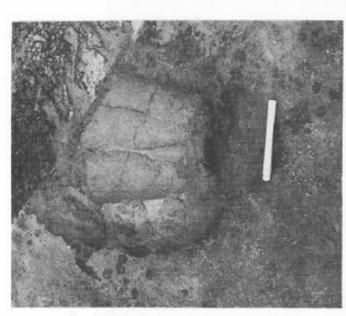


3. Bトレンチの土器出土状況

## 第2図



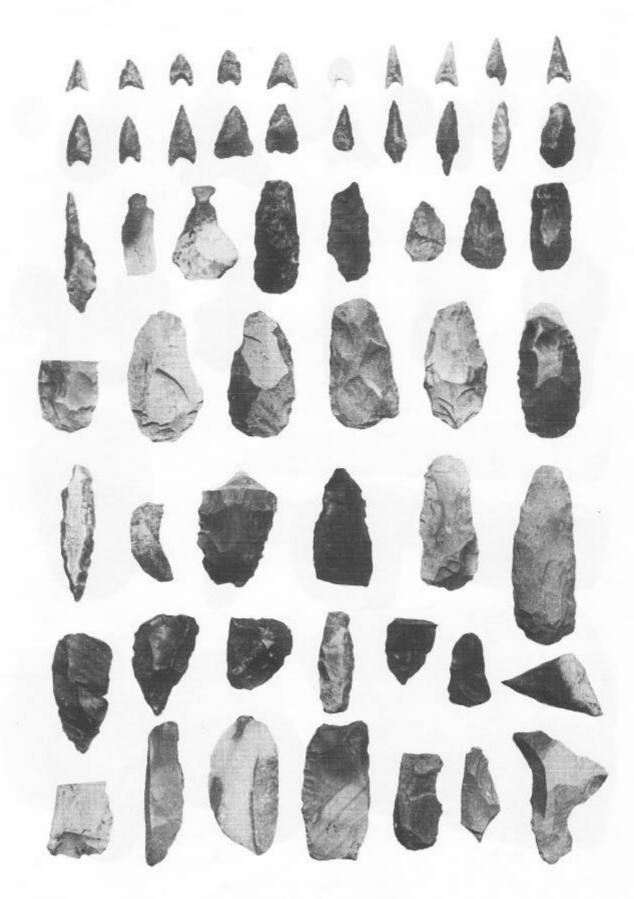
1. 土掘用石器の出土状況



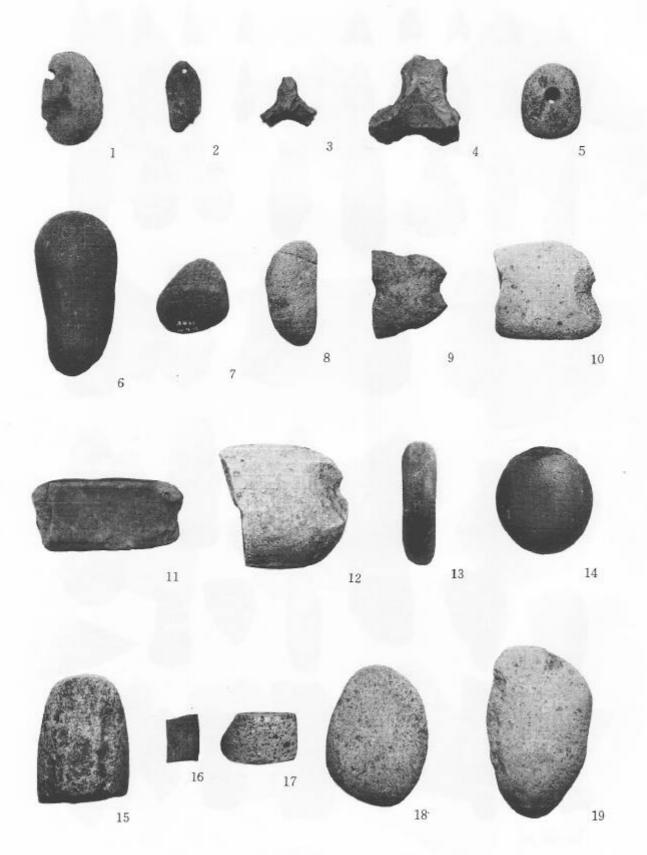
3. 第1号住居跡、炉とふせられていた土器



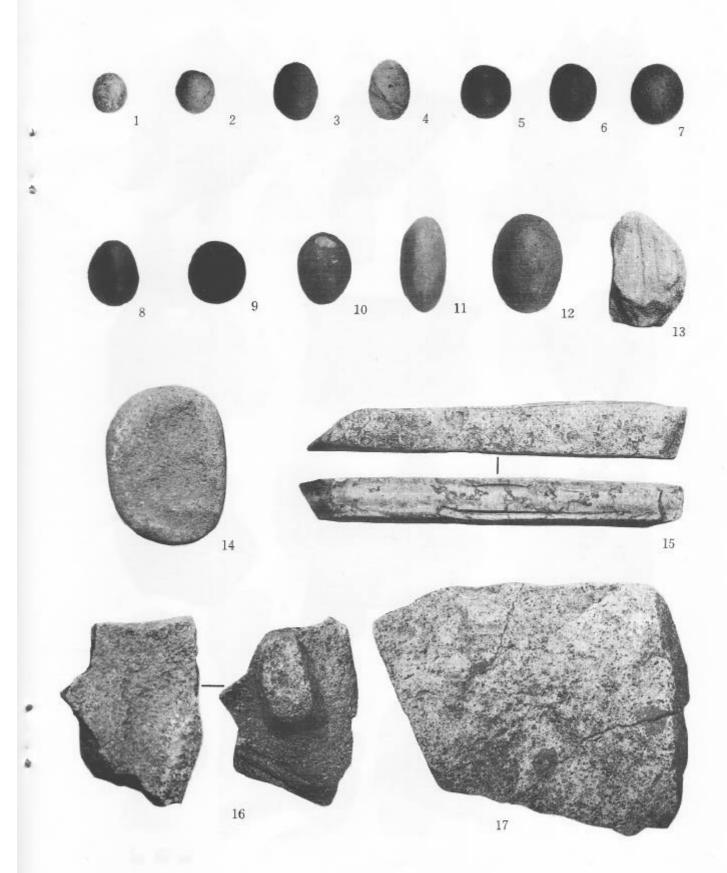
2. 第2号住居跡, 柱穴と袋状ピット



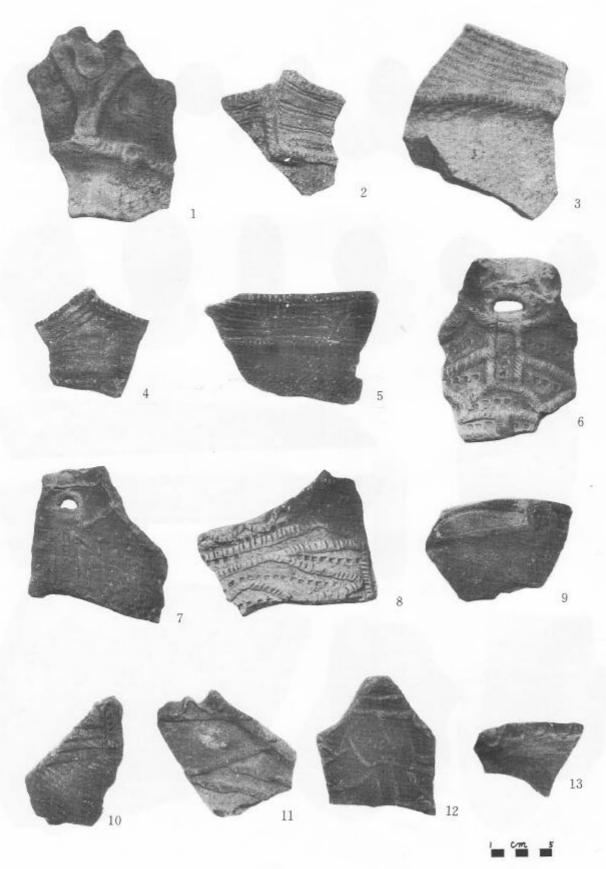
第3図 石 器



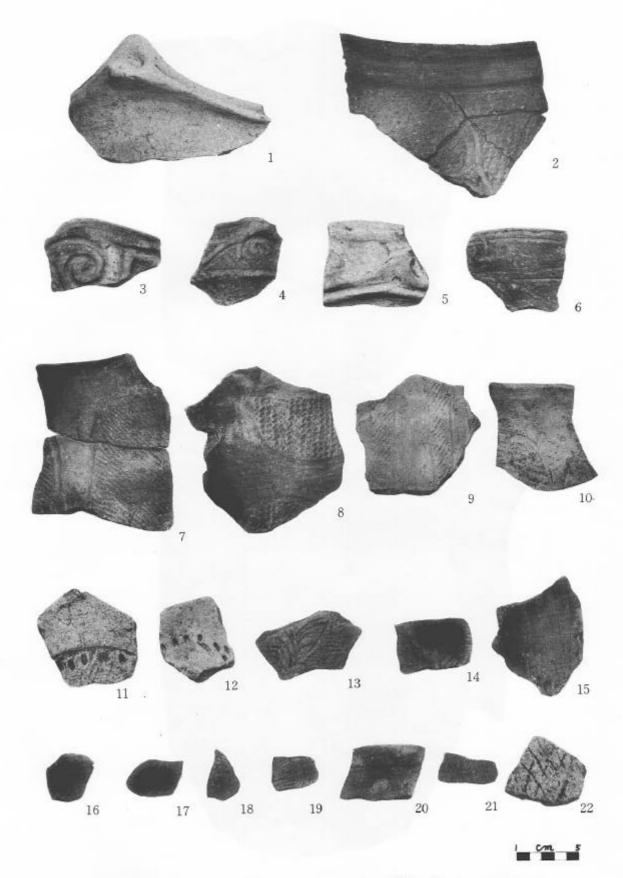
第4図 石 器・石製品



第5図 石 器·石製品



第6図 土 器



第7図 土

器





第8図 土

器

1. 口径29.5cm

2. 口径27.0cm





第9図 土 器

1. 口径19.5cm

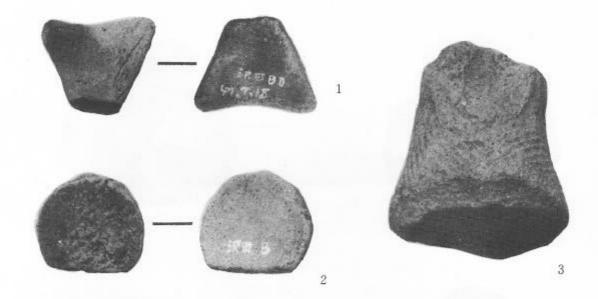
2. 口径23cm 器高27cm





第10図 土 器 1. 口径23cm 器高26cm 2. 口径18.4cm

2

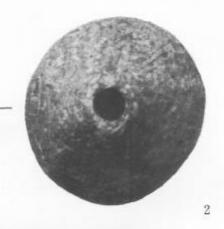




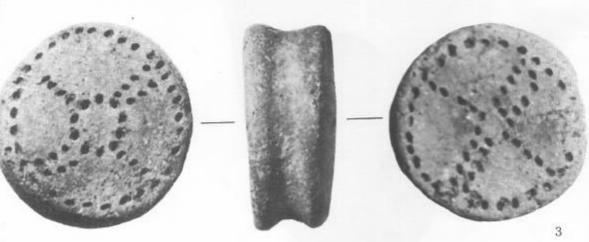
第11図 土 器・土製品 4. 口径24.5cm 器高29cm







秋胃果選戲文化財七八



第12図 土 製 品